

間瀬幸江

Mase Yukie 宮城学院女子大学教授

第2回

稀代のフラッパー：ゼルダ・フィッツジェラルド 被抑圧者としての人生の軌跡

先月、孤高の求道者ココ・シャネル(1883-1971)を称えた筆でござる、ゼルダ・フィッツジェラルド(1900-1948)を語るの、いかにも分が悪いかもしれない。ギャルソンヌ・スタイルを創造したフランスの女と、それを消費したアメリカの女。荒波に挑み世界的メゾンを築き、天寿を全うした女と、アメリカで最初の「フラッパー」の異名をとり、名作『グレート・ギャツビー』の作家スコット・フィッツジェラルドの妻で、破滅的な人生を送り、最期は入院中の精神病院の火災で落命した涙もろい女。しかし、いずれも獅子座の2人はそれぞれに、男性優位の社会が押し付ける「女」の枠組みに抗おうとした。

フラッパーとはゼルダにとって、「女」であることへのやむにやまれぬ抵抗を表出させる若さのことであった。ゼルダは言う。「女」という鑄型を甘んじて受け入れようと、そこから逃れようともがこうと、「女」であるとはすなわち、命が尽きる「最後の最後まで」、「死の床の雰囲気」にまわりつかれて生きることであり、フラッパーとは、これに抗い自分を賭けるひとときの「権利」なのだと。

ゼルダのこのエッセイ「フラッパー讃」(Eulogy on the Flapper)が『メトロポリタン・マガジン』に発表されたのは1922年。その後1934年まで、小説やエッセイなどの作品を発表し続けたが、その作品のほとんどに、夫のスコットが参加している。内容への口出しから、作者の標榜に至るまで、スコットの「参加」のレベルはさまざまで、その具体の検証は専門家でも難しいという。いずれにせよゼルダは、書き手としての自由意志を、他でもない人生のパートナーによって、常に脅かされ続けた表現者であった。

1918年に出会った18歳のゼルダと22歳のスコットは、スコットの作家としての成功を経て、2年後に結婚にこぎつけた。しかし、熱に浮かされたような2人の関係は次第に悪化し、それはちょうどゼルダが執筆活動を始めた時期と重なる。執筆活動への動機は当初、夫を支えることだったかもしれないが、自作が——ときには勝手に——他人名義で公表される理不尽さに苦しむようになるまで、そう時間はかからなかった。しかも、この「他人」は、書き手としての彼女の自立を阻みさえした。そしてこの「他人」とは、夫であるスコットその人であった。彼女の被った精神的打撃が複雑になった所以であろう。

若くて美しくて奔放で、刹那的でありながら多くの抑圧も背負った、狂乱の時代の擬人化さながらの彼女の人生は、私たちに多くの思索の糸口を与える。剽窃が犯罪とされる根源的な理由。社会に根づく男女の不平等が家庭に持ち込まれる恐怖。明文化された権利に守られずに生きる苛酷さ。今日の私たちが読むことのできるゼルダの小説やエッセイなどは、かならずしもゼルダの自由意志だけで書かれてはいないのかもしれない。しかし、ゼルダが存在しなければ書かれなかったテキストで

あることに変わりはない。テキストの中に、彼女のばらばらの断片がつまっている。断片とは、全体が存在することの証である。

ゼルダ・フィッツジェラルドことゼルダ・セイヤー。小説を書き、バレエ・ダンスを踊り、絵を描いた表現者。そして不世出の作家を夫に持った人物。娘のスコッティ曰く、「南北戦争の記憶も新しいアメリカ南部アラバマに生を受けたにしては、驚くほど解放されていた」人物。



ジョルジュ・バルビエ『厳粛なメロディー』
George Barbier, Incantation (1923)

大修館書店『英語教育』5月号掲載
転載禁止



本文の参考文献は
QRコード参照